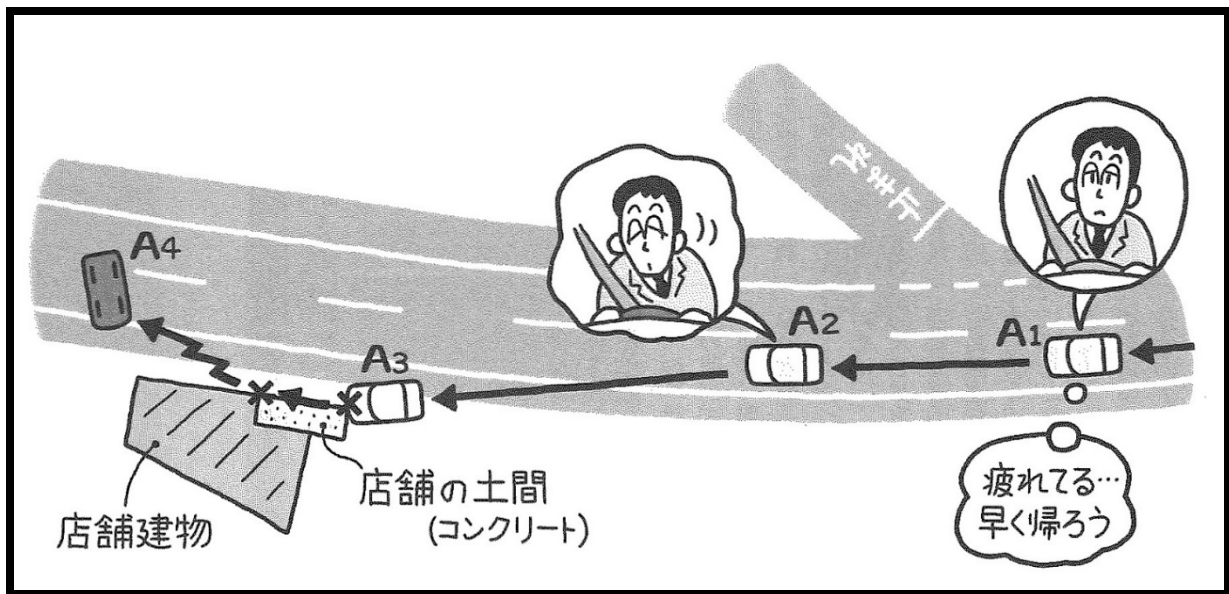


■事故の概況



事故類型：車両単独

発生日時：午後9時頃

当事者A：普通乗用車 20歳代 男性

■ 事故の概要

Aは、残業を終えて自宅に向かう通い慣れた往復2車線道路を走行していました。疲れてはいましたが、いつものことであり、早く自宅へ帰りひと風呂浴びたいと思いながら運転を続けました。運転し始めてしばらくした頃、上り坂の緩やかな右カーブの手前で気がつかないうちに居眠り状態に陥ってしまい、直進のまま走行し、道路左側へ逸脱してその後店舗に衝突し横転してしまいました。

■ 事故から学ぶ

事故調査をしていると、この事例に限らず「ブレーキをかける」とか「ハンドル操作をする」といった危険回避行動がまったくとられていない事故も数多く見かけます。疲労した状態では覚醒が長く続かない場合があります、その結果、居眠り運転となって事故になる可能性が高く、非常に危険です。

居眠り運転による事故は脇見運転として分類されますが、わき見運転は、対向車との正面衝突や路面逸脱という重大な事故にもつながります。

また、脇見運転は危険認知ができていないため、ブレーキによる減速やハンドルによる回避操作が行われない結果、衝突速度も高く、重大事故につながる可能性が極めて高くなります。